120

特245
272

國内の革新と明日の日本

②

0001447000

0001447-000

特２４５－２７２

国内の革新と明日の日本

古谷幸吉・著

古谷幸吉

昭和１３

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

特245
272

帝國圖書館藏

目次

一、緒言……（一）
二、西歐思想の本質……（二）
三、日本精神の特質……（六）
四、今日の日本、明日の日本……（一〇）
五、結語……（二〇）

昭和十三・本館

國内の革新と明日の日本

古谷幸吉著

一、緒言

私はあるところでかう書いたことがある。「諸君の周囲を見給へ。職業政事家は、俺は政党員だ、党勢を擴張するのに何の不思議がある。法律家は、法律のことなら俺の専賣だとばかり、盛んに法理論を振り廻す。教育家は、私は教育者だから、例の通りいつも生徒に向つて忠国愛國を説いて居ります。坊主は坊主で如来様はありがたいぞ、拜め〳〵。官吏は官吏で、ナニ役所へ行つてり や月給も上るし恩給もつくんだ、と無責任なことを考へてゐる。資本家は資本家で、搾取することばかり考へてゐるし、労働者は労働者で、賃銀の値上と労働時間の短縮ばかり要求してゐる。学者は書斎と実驗室へ閉ぢ籠つて、象牙の塔を一歩も出やうとしないし、学生は卒業証書を目当てに勉学してゐるのだし、著述家は個人主義と自由思想を取違かれてゐる」と。

実際、満洲事変当時の世情はこんな風で、みんなが小乗的な立場からのみ物を考へて、勝手なことをしてゐたと言つてもいい程であつた。言葉を換へて言へば、それほど所謂個人主義的であり自由主義的であつた。

それが五・一五事件や　二・二六事件を眼のあたりに見、今次の日支事変が起るに及んで私達の周囲は、我が国古来の傳統や肇国の精神に眼覚め、日本精神から外来思想に検討を加へるやうになつた。さうして私達の周囲の多くの者が、世界の中に現実の日本を再発見し、日本的な特色を再認識しつゝあるのは、真に喜ばしい。何故なら、明日の日本を豫見することは、今日の日本を知ることであり、将来の日本を建設することは、単に日本の特色を知るのみではなくして、実に、彼の長所をも知ることであるからである。我々は決して外来思想を排斥する必要はないので、寧ろこれを克服しなければならぬ。

二、西欧思想の本質

外国と日本と何処が違つてゐるか、それは政治上社会上は勿論、気候、風土、人情、言語、習慣等種々の差異があるであらうが、我々は先づそれらの基調をなすところの思想について考察する必要がある。

欧洲に於ける文芸復興運動以後の近代思想を大観すると、人間以上のもの――即ち神に対する人間の叛逆であつた。いや、王室の墮落や、貴族の専横や、教会の束縛に対する不満や反抗が原因であつて、人間を、神から、因習から、その他あらゆる、偶像から解放しやうとしたところの、個人主義

の思潮であつた。即ち欧洲の特殊の國情の中へ醗酵した思想であることを我々は注意しなければならぬ。

シヤン、シヤック、ルソーは「民約論」の中でいふのである。

「人の生れ落つるや自由である。而も到るところ鎖につながれてゐる」と。

しかしよく考へて見ると、我々は生れながらにして自由ではないのである。さうして生れ落ちるや、既に死といふ束縛を約束されてゐるのである。しかもこの束縛は決して地球の上ばかりではないので、遠く我々の天界についても考へて見るならば、太陽を中心として、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、といふ順序に、定められた軌道を運行してゐるのであつて、決して惑星自らが、自由に勝手に運行してゐるのではないのである。

それでは、誰が軌道を定めたのであるか、それは太陽からの巨力と惑星自らの大きさと重さによつて定められたので、つまり宇宙を貫く法則が厳乎定めたのである。

人間が生れて死ぬのも宇宙の法則なので、決して自由ではないのである。人間に健康な人があり病弱な人がある如く、惑星にも大いのもあり小いのもあり、重いのもあり、軽いのもある。従つて、水星の公轉日数は八十八日であるが、

金星は二百二十四日だ。地球は三百六十五日であるが、天王星では三万六百八十六日で、惑星であることに於て平等ではあるが、かうした差別があることは人間界と変りはない。

であるから、惑星は、一面に於て、太陽系といふ團体の中の惑星であると共に、他面恒星自らの惑星であつて、何から何まで太陽に隷属してゐるのでもない。ことは、地球が地球自らの営みを営んでゐることによつて、誰にでも諒解出来るであらう。言葉を換へて言へば、地球は一面に於て「全体」であると共に、他面「一個」であるといふことが解る。恰も我々が日本といふ国家の臣民であると共に、日本人といふ個人であるのと同じである。

ところが、この近代思想の特色は、個人を強調して全体を否定せんとする観念が強く、イブセンや、ニイチエの如きも「個人の発展の為めには、国家は存在する必要がない」と言つてゐる。殊にニイチエはアンチ、キリストとして神を抹殺し去つて「超人」の出現を予言した。彼に従へば、「超人」は解放され完成された個人であつて、現世の桎梏を離脱したところの、より高き一種のコスモポリタンの世界人である。

世界人は人種や国籍を超えたる人であるが、仮へ人類の文明が今日以上に高く昂揚さるる時代にせよ、果してかうした境地に生活することが出来るであらうか。

学問や思想に国境はないといふ。しかし学問は地球の上だけの学問なのである。即ち地球の一年は三百六十五日であり、一日は二十四時間であり、一週間は七日であるが、これは金星や火星へは適用しない。これを我々の日常生活について言へば、我々の昼は米国では夜である。日本の夕方の六時五分は英国では朝の十時五分だ。我々日本人は米を常食とするが、欧米人は肉を主食物とする。或は一年中裸で暮す人種もあれば、煖炉をめぐつて送る人種もある。そこに異つた厂史が綴られ、異つた異想が生れ、異つた国民性が育まれ、異つた言語や風俗や習慣が行はれるので、日本人に大和魂があるが如く、独逸には独逸の精神があり、伊太利には伊太利の主義があり、アメリカにはアメリカの気質があるのは当然である。つまり、学問や思想に国境かないのではなく、学問や思想の普遍性なのである。

社会主義者は人類の未来――支配なき社会についていふのである。

「人々は毎日五時間宛労働すれば生活は完全に保証される。その他の時間は各人が各人の希望の為めに、或は学問の為めに、或は芸術の為めに。

そして、この国では労働の強制ではなく、賃銀制度でもない。科学を応用して工場を完全にし、時間を短縮し、筋肉労働と、頭脳労働を調和し、労働を苦痛なき愉快なものとする。かくして生産物は、その能力と慾望に応じて分配を受ける」と。

これが夢想に過ぎない、ことは明白である。何故なら、かうした近代思想の鼓吹者、若は宣傳者達は、全世界を単に個人の集團的社会であるかの如くに思做して、人種といふ差別があり、民族といふ障壁があり、国民性といふ相違があり、異つた風俗や人情の国家の集團と考へ、なかつたところに、重大な錯誤に陥つてゐるからである。

三、日本精神の特質

我々が最も大きな誇りであり最も大きな喜びであることは、言ふまでもなく日本人に生れたことであるが、遠い〳〵建国の初めに於て、既に大和民族の辿るべき道――今日の栄光の基を照示せられ給ふた、天照大神の皇孫瓊々杵〳〵尊に下し給へる神勅を拜する毎に、実に深い国民的感激を覚えざるを得ないのである。

神勅に曰く

豐葦原の千五百秋の瑞穂の国は是れ
吾が子孫の主たるべき地なり。宜しく
爾皇孫就きて治せ。行矣。宝祚の隆えまさむこと当に天壌と窮りなかるべし。

宝祚の弥栄を天壌に於て祈念遊ばされたところに深い意味が伴される。

天地は森羅万象が生成発展するところである。人間も生活し、禽獣も棲み、草木も、生ひ茂るところである。即ち天壌と窮りないと仰せられた神精神は、人間本位でも個人主義でもなかつたことが伴される。実験のところ、我々の祖先ほど天を崇め地を畏れた国民はあるまい。長くも、明治天皇の五箇條の御誓文には

「旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ」

と仰せられてゐるのを初め「謹御して天地に愧ぢず」とか「天壌に敬く」とか「天翔顔面」とか、人間の世界以外に、天意があり地心があることを自覚してゐたのである。それだけ自然を愛し自然に親しんだ。それは我が国の詩歌がよくこの間の消息を物語つてゐる。

敷島の大和心を人問はゝ　朝日に匂ふ山桜花、　とか

東風吹かば匂ひ起せよ梅の花　主なしとて春を忘れそ。

とか、その他いくらでも挙げることが出来るが、花鳥風月咏嘆詩である俳句の如きは、恰くが自然に対する思慕であり、愛着であり、讃嘆であると言つてよい。

我々の祖先は山へ登るにも六根清浄を唱えた。決して山を「征服」するなどとは考へなかつた。即ち修行だからである。我々の祖先は、また個人の解放だとか自由の獲得だとか考へなかつた。それは修身であつた。さうして、それが科学であり治国であり平天下であつた。自由思想とか個人主義とかいふ文字は舶来語であり輸入語であつて、我々の祖先は全然知らなかつた。そこが宗教的圧迫や封建的束縛に反抗して起つた近代思想と厳然に異つてゐる点である。

個人主義とか自由主義とか言つても人類が集団的に生活する以上、社会的に国家的に拘束されるのは必然であつて、無制限に放縦せらるべきものでないことは明かである。今や個人主義は無産主義にまで発展するに反んで、全く行詰つて終つた。人間本位、個人本位の敗北である。ファシズムの如き主義が生れたのもその反動である。　我々の祖先は天地と共に生きて来た。それは正義であり大義名分であつた。我が国に於ては個人は単位ではあり得たが、本位ではなかつた。即ち家族の一人であると共に国家の一員であり宇宙人であつた。

我々は我々の祖先が外来文明を輸入して克服した如く、この個人主義をも摂取して醇化せねばならない。　東西両思想の由来及び発展の過程を考へて見ると、彼は所謂神を否定し偶像を破壊して個人を解放し自由を獲得し、人間の力によつて、天国を地上に建設しやうとしたのである。であるから、あらゆる方面に向つて分析解剖のメスを振つたので、従つて個的であり科学的であり実証的であつた。その結果科学の発達となつて蒸気や電気や天体の発見となり、汽車や電車や飛行機の発明となつた。しかし医学とか、動学とか、或は物理学とか、植物学とか、天文学とか、一局部のみから分析解剖する結果は、綜合力と包容性を失ひ勝になるのは免れない。個に徹することが出来ても、全に通ずる道は遠くなるばかりである。　そこへゆくと、我々の祖先は偉大なる綜合力と包容性をもつてゐた。地上を浄土とし楽土とすることに於て変りはないが、それは個人を解放することでもなく、人間をより高くすることであつた。即ち己を鍛錬し己を修行して、人間界の束縛を脱ることであつた。そこに精神の訓練と、情操の陶冶と、個人の鍛錬とを必要とするのである。　我々の祖先は偉大なる綜合力と包容性をもつて、儒教を輸入して武士道精神を完成し、仏教を受入れて国民道徳の發達を促し、英雄護国論の如き立正

安国論の如き日本精神となつて、更に輝かしい精神文明を打立てたのである。

幸ひ四面海に囲まれて十分温気のある大山国日本は、温暖な気候と豊富な雨量と肥沃な国土に恵まれて、外来文化を咀嚼し醇化するに適してゐる。我々の任務は実にこの精神文明と器械文明との調合と調和でなければならない。

四、今日の日本　明日の日本

我々は東西両思想の特質の大体について考察した。更に今日の日本を知ることによつて、どんな風に明日の日本を建設すべきかを検討したい。　我々はこの頃よく官吏制度の改正とか行政機構の革新とか、その他産業の上に教育の上に、いろ〳〵な改革といふ声を聞く。実際、今日の日本は様々の方面に亘つて、革正の機運が動いてゐることは事実であるが併し何故に改革せねばならないのであるか。哲学のない、指導精神のない改革などは無意義であり、そしてその改革が枝葉末節に止まつて、根本に触れないやうでは有害無益である。我々は先づ改革せねばならない根據を把握しなければならぬ。　今日改革せねばならぬことはいろ〳〵あらう。併し何から先きに改革さるべきであるか、といふならば、先づ政治でなければならない。何故なら、政治と我々の生活とは密接不可分の関係がある。ひと頃政友会が内閣を組織すれば景気がよくなり、民政党が天下を取れば不景気がくると言つた。それほど政治は我々の生活に影響してくる。諸君、見給へ、明治維新に於て「王政復古」がなかつたなら、維新はこそ、始めて新支那の更生が期待されるのである。政治は即生活である。この新にならなかつたに違ひない。支那に於ても亡友や中支に新しい政權が確立してこの意味に於て我々をしてよき日本人たらしめ、よき日本国民たらしめ、よき世界人たらしむる為めには、よき政治を施行する如くせねばならない。政治と言へば議会政治であり、議会政治と言へば選挙であるが、私はいつも投票に行くのを躊躇する。そして棄権して終ふ場合が多い。尤もある人の説によると、適当な候補者がない場合棄権することは、当然選挙権の行使であるといふ。私は決して私の選挙区から立候補する人を人物の上から不適当だとは思つてゐない。甲の人は会社の重役や政界次官をやつた人で、人格も識見も高い人だと聞いてゐる。乙の人は新聞社にゐた人で、某政党の総務だし政界官の経歴もある。丙の人は所謂無産党の闘士で、弁舌も旨いし年が若いといふところに魅力も感じてゐる。みんな世間的には有名な人ばかりで、演説を聞いても成程と首肯する。それでゐて喰ひ足りない。　では一体何が不足なのかと自問自答して見ると、生活が違ふ。我々は何処へ行くにもテクか、でなければ電車へ乗るのに、甲とか

ひとかいう人は抱への自働車がある。丙といふ無産党の闘士は財産がないけれども、所謂無産階級の為めに闘つて来たインテリで着述業である。我々勤労無産階級を理解し同情することに於て前二者には勝るが、併し代議士は我々の代表者であるのだから、理解や同情があるといふ理由だけで、選出すべきものでないと私は考へる。選挙演説に於ける理論や同情は、次の理由によつて、何の決にも立たないことが解るであらう。

諸君も知らるゝ通り政党には地盤がある。A氏は甲党の根據地で丁氏は乙党の金城湯池であるといふ風に。そして政党の本部では選挙戦が始まると、この地盤々々へ選挙民が気に入りさうな即ち世間的に有名な人とか若ば郷党の先輩とかいふ候補者を立て、所謂公認料といふ相当大きな金をこの候補者へ渡す。諸君ところでこの候補者が当選して議会へ出られてからの行動を注意して見給へ。この候補者は演説会では我々に理解と同情の深いことを示したが、当選して終ふと忘れて終ふ。　普通選挙が施行されて所謂新人が何人となく議会へ送られたが、この新人の理想なり意向なりが議会へ反映して実現したためしがあるか。ありはしない。何故なら、政党には党議といふものがあり、

この党議に従はなければ党則を紊るものとして除名して終ふ。除名されて終へば、次の選挙にはもう当選の見込がない。だから党議に服して、言ひたいこともしたいことも頬冠りで行くやうになる。これを一言にして言へば、今日の代議士は名は国民の代表ではあるが、実は、政党の代表なのである。私が投票に当つて躊躇する理由はこゝである。諸君、こゝをしつかり認識する必要がある。

諸君、これは実に由々しき大事であるぞ。

明治天皇の憲法発布の勅語にはかう仰せられてある。

朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉体シ朕カ事ヲ奨順シ相與ニ和衷協同シ益ミ我カ帝国ノ光栄ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負担ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

勅語に仰せらるゝ、臣民とは、取りも直さず我々国民の全体をお指しになつたものと拝察する。而してこの勅語の御精神によつて、我々国民なるが故に政治に参與せしむる権利を賜はつたのである。かういふ趣旨から制限選挙も撤廃されて、今日の所謂普通選挙となつたのである。併しながら実際に於て、勅語の御精神は歪曲されてゐる。世間では政党が無力だとか人物がない

とかいふが、政党が振はない根本の理由は、政党の存在そのものが我々の生活に即してゐないからだ。かけ離れてゐるからだ。即ち形式は国民の代表ではあるが、実際に於て、政党の代表者の寄り集りだからである。これでは　物語の御精神である国民の総意が議会へ反映する筈がないのである。実に悲しむべき、実に憐るべき事実である。これは如何しても改革されなければならない。

現行選挙法の別表によれば、その定員は、人口の多寡によつて割当されたものである。併し今日では我々の職業も多岐に亘り、生活も複雑になり、都市居住者と地方人との間には、職業の態様にも生活の内容にも非常な開きがある。同じ俸給生活者でも都会と地方では生活の程度が違ふ。これは小資商人にも工場労働者にも同じことが言へる。しかもこれは紙に見たゞけであるが、更にこれを横に考へて見ると、同じ都会に住んでゐても、俸給生活者と小資商人では全然生活の内容が違ふ。　生活の内容が違ふことは、結局政治的の影響が違つてゐるしとである。政治的の影響が違ふと、自然政治上の見解なり立場なりが違つてくる。譬へば景気のいゝ時には、月給取りなんか馬鹿々々しくて出来ないとか費商人は言ふが、不景気になると、俸給生活者を羨む。今次の事変などでも新聞軍需工業者はホク〳〵であるが、一般の商工業者には均霑しないといふ風である。これはちよつと考へると、経済上や社会上の影響のやうに思はれるが、それは表面だけで、詰じ詰めると政治の影響なのである。前に言つた通り政治即生活なのである。この政治的の見解や立場の違ふところの小資商人も、自作農も、工場労働者もいつしよくたにしてゐるのが現在の選挙法である。国家を構成する有機的な選挙民を単に人口といふ頭数によつてのみ割当すことが、如何に妥当を欠いてゐるかといふことはこれで解ら う。

諸君の中には現在の代議士は、あらゆる職業を網羅してゐるではないかといふかも知れぬ。試に昭和十二年度に行はれた第二十四回選挙の結果について調べて見ると、全議員四百六十六名の中、弁護士が最多数の八六であり次で農業の七四、会社重役七一、無職六五、著述業四九、会社員一八、新聞社長一三、医師と官公吏が同数の八、大学教授六、退役軍人五といふ順序であり、この他あらゆる職業から選出されてはゐるが、大体に於て国民生活の上流層が多数を占めてゐる。職能別に見ると実に不公平も甚しく、弁護士や農業や著述業などは必要以上に多く出てゐる。　議会政治は弁論の巧みな者や生活の上流層のみで構成すべきところでなく、生活の中流層や細流層やいろ〳〵の階層の立場から政治的見解を披瀝して、国民の総意を反映せしめて審議を尽すべきである。

試に次のやうな場合を想像して見給へ。こゝに小賣業者に不利益な法案があつたと假定する。弁護士や会社の重役や著述業者たちは、小賣業者を理解し同情してゐるであらう。併し実際に於ては小賣商人の体驗もなく生活の内容も政治的立場も違つてゐるこれらの人達が、どの程度まで小賣業者の為めに戦ふかは、従来の例から見ると甚だ不安である。況して政党員であつて党議に束縛されゐる以上尚更である。聞けば第七十三議会に於て通過した改正酒造税法の実施で、新年度から免許制度となつた結果、全国の酒店に働いてゐる店員達は、これまでのやうに自由な開店が出来なくなるといふではないか。お互なに考へねばならないことだと思ふ。かういふ点に鑑み現在の選挙法は断然廃止して職能代表に改正し、各異つた角度と立場から和衷協力審議を盡すべきである。集團生活に於ては、各自が各自の生活を擁護すると共に、更に進んで生活を改善し向上することには努めなければならない。そして特別の事情がない限り、國家の救済や社会の扶助を避け力如く心懸くべきであると思ふ。

こゝに不完全ながら私案がある。これは全国各道府縣から農工商等の職能に大別して、左の通り一名宛の代表者を選出するのであるが、六大都市の如きは別に考慮する必要があらう。

一、中小農（山漁村を含む）　六、大工業者、
二、大農　七、俸給生活者、
三、中小商業者（店員を含む）　八、工場労働者
四、大商業者、　九、医師、弁護士、芸術家、著述業、神職僧侶等
五、中小工業者（職人を含む）　十、婦人

これは只大綱を示したゞけで立法技術その他の方面から細部に亙つて研究さるべきものである。かうすると各道府縣毎に職能別に選挙が行はれて、十人宛の代表者が出る訳である。こゝで婦人に参政権を與へることであるが、これは原則として当然さうあるべきであるが、私は先づ有夫の妻に與ふべきであると考へる。何故なら、フラッパーは社会的訓練に乏しく、人生上の信念も不確実で因襲上の幽霊を免れ得ないであらう環境にあるからである。かくて埼玉縣自作農組合とか、富山縣中小商業者聯盟とか、和歌山縣婦人協会とか、廣島縣参政婦人会とかいふ選挙母体が生れるのは必至である。それが今日の政党に取つて代る日遠ひない。何も暴力を以て政党の本部を占據する必要もなく、政党の首領を殺害する必要もない。諸君はかうして職能別

に代表者を対立させることは、所謂階級闘争を激化せしめ、延いては、スペインのやうな内乱を誘発せしむる虞があると憂ふる向があるかも知れない。それは曾て我々が見た政党の死試合の如き多少の厚様は免れないであらう。しかし日本の軍隊が大元帥陛下の統帥し給ふ軍隊である限り、軍隊が何れの階級にも加担しないであらうことは何人も信じて疑はぬところであらう。

諸君はかうすると、大農者や大商業者や大工業者が合流結束して党を創設し、中小農や中小商業や中小工業の一派が、別の党派を結成するかも知れぬと思ふかも知れない。それは想像されないこともない。併し農業と商業と工業とはその政治的影響も異ふことを考へるならば、農の選挙妨害が違ふのみ、ならずその政治的立場は自ら異るものがあることは言ふまへ一党を組織したにせよ、その内容に於て既成政党の如き結合とは全然別個のものでもないことであり、その内容に於て既成政党の如き結合とは全然別個のものであり、且つ俸給生活者や医師弁護士等のインテリ階級や婦人の団体が存在する以上、法律上の不正が行はれない限り一党の絶対多数を決して壟断せらるゝことはないものと考へられる。また諸君の中には、今日の政党が、さう易々と後退しないだらうといふ者があるかも知れない。政党が無力であるとは言へ、その機関を総動員しなならば、その調査の精確といひその統計の細密といひ、恐らく政府のそれと匹敵する威力をもつてるのであらうし、その数量を一朝にして覆へすことは困難かも知れない。併し何事も時勢である。時勢の前には幕川幕府も倒れた。時勢の前には大小も必要がなくなつた。時勢の前にはラムプも消えて失くなつた。

今日の政党はまた恰度このラムプである。その光りは新しい時代を照すには餘りに暗く、新しい時代を指導するには余りに弱い。言葉を換えて言へば、政党は既にその使命を終つたのだ。今日、政党内閣の出現を望むものは、恐らく国民の一小部分に過ぎないであらう。最近、また新政党の樹立運動とかいふ噂を聞くが、全く無意義なことで、我々国民に取つては曾て行はれた政党の離合集散と同じ程度の関心しかもつことが出来ない。

私は政党に対して何等の敵意も何等の憎悪も持つてゐない。否、それどころか、政党人の中には、わが憲政の本義の為めに、議会政治確立の為めに闘つて下すつた幾多先輩の方々が居られる。私はこれら先輩に対しては、常に尊敬と感謝の念をもつてゐる。併し刻々に世は遷り時は過ぎゆく。今日の選挙法が不完全であつて、職能代表を選出することが時代の要求であり、それが日本国民の幸福であるならば、政党人と雖も必ず小我を捨て大乗的見地に立つて、この業

に共鳴しこの案を支持しこの案の通過に援助を惜まない人が、たくさんあるであらうことを信ずるものである。

五、結語

我々は東西の思想を考察し今日の日本を検討して、明日の日本はこゝから開けるであらうと信ずる。それには先づ人心を一新することが必要である。國民精神總動員は掛声だけであつてはならぬ。世間の人の中には、今は非常時だ、戰時体制下だ、國内の摩擦は成るべく避けねばならぬといふかも知れない。我々と雖も好んで相剋を激成しやうとは思はない。けれども國民は既に長期戰の覚悟を決めたのだ。十年が三十年が五十年であらうと、戰ふ決心なのだ。戰爭が終つてから改革しやうなどゝは、明日の日本を考へない、近視眼的お座なり主義の、実に始末に終へないぐうたらの退嬰者流である。

日本の國は宦僚だけの日本ではない。政党だけの日本でもなく、軍部だけの日本でもない。それと同時に資本家だけの、勞働者だけの、男性だけの日本であつてはならない。あらゆる階級級層の國民が一致團結打つて一丸となり、心身をつくして皇室を扶翼し奉ること、我々國民に與えられたる任務である。かくして八紘一宇、一君萬民の輝かしい國体は天壤と共に窮りないであらう。

あらゆる改革や革正はそれからである。華族の存廃問題をどう扱ふか、恩給亡國の問題をどうするか、官吏制度をどう改めるか、その他産業上、社会上、教育上の改善も先づこの選挙法を改正して後のことである。隱れた叡智を聚めることが必要である。我々は決して驕してはならぬが、同時に無驕であつてはならぬ。

打開せよ、打開せよ、窓を開け、障子を明け放せ。さうして新鮮なる空気と燦々たる光線を入れよ。さうしないと人々は窒息して終ふぞ。

筆を擱くに当つて天地神明に誓ふ。八百萬の神々よ、この一文は決して一己の名誉や一家の利益の爲めに草したものでないことを照鑒あれ。

（非賣品）
昭和十三年八月一日……印刷
昭和十三年八月五日……發行
著作兼發行人　東京市荏川區平久町一九　古谷幸吉
印刷所　東京市神田區神保町一丁目八　愛耕社
電話神田三六五三（代）